第４回政策討論会の概要及び主な意見等について

〇協議事項

・丹波ささやま栗振興会からの聞き取りについて

〇概要

■丹波ささやま栗振興会

・丹波栗は平安時代から朝廷や将軍家に献上されてきた歴史的な栗である。その後、昭和40 年代に旧兵庫農大の荒木農学博士の研究により、兵庫方式という新しい栽培方法が確立された。当会では、その兵庫方式をバイブル（手引書）としながら、各会員の名人芸により丹波栗を生産する中、質量ともに向上させ、ブランド力強化に努めてきた。こうした経緯もあり、丹波と篠山は一心同体であることから、丹波ささやま栗振興会と名乗っている。

・平成 23 年には、丹波県民局が丹波栗再生戦略会議を立ち上げ、生産者、加工業者、流通業者が一体となって 6 次産業化を目指してきた。また、丹波栗は京都丹波でも生産されていることから、兵庫丹波と合わせた大丹波連携構想を打ち上げた。今年度から篠山市、丹波市、京都丹波が 1 年交代で合同品評会を行うことに決定している。当会では、それに向けて栗づくりにさらに励み、大丹波品評会へ参加していこうと決意している。一体不可分の丹波と篠山をこの際に同時に打って出たいと考えている。

・丹波市発足以来、丹波の中心は丹波市と捉えられている。実際に栗拾いや観光客から、「なぜ丹波市の栗が篠山にあるのか」、また、「篠山の栗は丹波市の栗である」と誤解されていることが現実と感じている。当会が自負している丹波篠山の栗としての位置付けがどんどん薄れていっているように感じている。

・大丹波構想の中で丹波は一つ、丹波栗は丹波で生産されたものが丹波栗であるとして、商標登録などで勝手に丹波栗の名称が使えないようにとの議論をしている。当会が提起している事柄は、丹波市や京都丹波の丹波栗がどうであろうと、全国の丹波栗がどうであろうと、篠山市は 2 年後に市政 20 周年を迎えることから、新生丹波篠山市として篠山の栗はこれだと言える自立した成人式が迎えられるよう取り組んでいきたい。

〇主な意見等（Q：議員、A 丹波ささやま栗振興会、「・」は団体の意見）

Q：丹波栗の絶対量が足りない現状であると認識している中、増産のための支援の要望でなく、丹波篠山市に市名を変更する要望なのか。

A：丹波篠山産丹波栗はプライドを持って作っているが、「丹波篠山」の言葉が薄れ、丹波市産のものであると誤解されつつある。そうした状況では生産者は生産する意欲が薄れ、生産量が落ち込む可能性もあること等から、市名変更を強く願っている。

Q：丹波篠山市に変更すれば、丹波栗が篠山のものであると認識してもらえるという見解か。

A:篠山市の特産品である丹波篠山黒大豆、丹波篠山大納言小豆、丹波篠山米、丹波篠山牛な

ど全て丹波篠山がついている中、丹波栗だけは丹波篠山となっていない。篠山市発足 20 周年を自信のある中で迎えたい。平成の大合併の第 1 号は篠山市であり、年号が変わって市名を変えた第 1 号も篠山市と先取りした中で、篠山の農業のあり方を真剣に考えてほしいという願いで当会は動いている。

・栗戦略会議の取り組みにより、この 6 年間で篠山市において 8～9ha の栗の栽培面積が増えている中、今後においても増やしていくよう取り組んでいく。こうした姿勢も含めてご理解いただき、願いを叶えてほしい。

〇協議事項

・市名変更に係る財政面の影響等について

〇概要

資料に基づき説明

〇主な意見等（Q：議員、A：執行部、「・」は意見）

Q：住民投票の可能性もあること等、どのように行うのか時系列で追って試算する必要があるのではないか。

A:時系列で整理する必要性については認識している。今回の積算に住民投票費用は含めていない。仮に住民投票が必要となった場合に、選挙管理委員会が行った試算では 2 千数百万円となっている。なお、住民投票の経費は精査する。

Q:市名変更は県に対し協議回答となっているが、県が認めない可能性はあるのか。

A：全国的にも稀な事例であること等から、現在、県に問合せをしている状況であるが、地方公共団体における自律権の範囲であると考えられることに加え、合併時のように県の議決を要するものではないことからも、市の意見が尊重されるのではないかと考えている。